

一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10-10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42-0211
定価 1部 150円堂
橋本清文

昭和六十三年年度

一泉同窓会総会開かれる

旧金沢一中校舎移転の記録映画を初公開



毎年十月十五日は絶対といつてよい程雨が降らないとか。今年も前日まで心配された天候も、当日は風こそ強かったがまずまずの天候。午後三時半より泉丘高校前庭の厳霜碑前に同窓会役員、泉丘高校々長始め同窓会々員、学校教職員の参加を得て石浦神社長谷宮司の司祭により、おごそかに慰霊祭の行事を行った。

夜は午後五時半より金沢市清川町のセンチューリプラザで昭和六十三年度総会並びに懇親会を開催した。

泉丘七回、八回、九回卒業期が総会幹事期となり会の運営進行に当たった。定刻前より会員がぞくぞくと集まり、三百三十余名の参加を得て総会を開会。先ず物故会員の冥福を祈



り黙禱を捧げた後、藤田副会長の挨拶、宮崎泉丘高校々長の学校の現況報告を兼ねた挨拶、事務局から事業、会計決算報告があり会員全員の承認を得て総会を終えた。引き続き会場を「兼六の間」に移し懇親会に入った。会場では英安吉初代同窓会々長が金沢一中が旧本多町より現在の泉野出町に校舎を移転した当時の模様を記録されたフィルムを子息の英勝雄氏（一中四十一回卒）から同窓会に寄贈されたので、同窓会事務局ではビデオテープにダビングして保管していたもので、今回ナレーションBGMを付けて再編集したフィルムを、会場に設けた大スクリーンに写し会員全員に観賞して貰った。当時の四



・五年生徒らが校長銅像や巨大な厳霜碑を荷車に乗せ、広坂通り香林坊、片町を経て犀川大橋を渡るさまは圧巻であった。
全員が鑑賞したあと、松村晴夫副会長の懇親会開会挨拶のあと、乾盃をして宴会に入った。
会場は昨年以上の会員であふれ、お互いテーブルを渡り歩いて旧友と語り合い、先輩後輩と挨拶を交わし合った。会も水谷昭（泉丘七回）司会者の進行でスピーチ、応援歌、校歌の合唱など次々とマイクが廻り、いつまでも名残りがつきず、時の過ぎるのも忘れ九時すぎ一泉同窓会発展を祝い万才三唱をして散会した。

内田雄太郎先生

と開成学園

山森青硯

(一中三十三回卒)

筆者が一中在学中の先生は、皆好きなお方ばかりであった。

マと渾名がつく先生が六人居られた。世上是れを一中の六マと呼んでいた。

アンマ(辻甫) センマ(橋船次郎) ニンマ(西崎武) フラマ(渡辺盛次郎) サンマ(板坂三郎)。

沢山の先生方の中で渾名無く、呼

び捨ては鑄木勢岐(鑄木)一人。又珍らしく敬語を附せられた先生は、内田雄太郎(内田サン)一人であった。

内田サンは数学(幾何学)の先生であったが如何なる前歴ある先生か、全く未知であった。

平常授業中、最も大切な項目(例



写真解説 「西田幾多郎(竹田篤司著)」より再写。前列左から藤岡作太郎、内田雄太郎、金田良吉、後列左から福島淳吉、松本文三郎、西田幾多郎、松井喜三郎。

えばピタゴラスの定理)は「是れは大切な所であるよ」と特に教示された。はたせる哉、期末試験はきまりきって御教示の箇所が出されるに決まっていた。

全生徒は其の箇所を金科玉条として、空暗する様にしていた。

それが良いか、悪いか全く未知であった。

不日東都某新聞紙上、東大入学率と出身校名の羅列が所載されていた。東都「開成学園(其始、佐野鼎の共立学校)」が、全国一トップであった。然かもそのトップ率が数年続いていた。

按うに「開成学園九十年史」と云う本を入手、同史二四六頁、元教員(逝去又は消息不明)の項に、驚くべし内田雄太郎と掲載されているではないか。

さては同名異人かと思つて諸書を調べて見た。

郷土数学(田中鉄吉編昭和12・6・15刊)二〇二頁に
元海軍教授内田雄太郎氏あり。第四高等中学校初回卒業生なり。目下開成中学校教諭を勤めらるる筈とある。又先生一中母校在職表と、開成学園在職期間とを対比して見ると左記の様であった。

内田雄太郎教諭 大8・4・1—昭和2・11(金沢一中泉丘高校七十年史)

前記「郷土数学」記載は昭和12・6・15刊であるから、先生は金沢一中退職されて後、東京開成中学校に勤められた事歴然、筆者の恩師内田雄太郎先生であることが分つた。

又「在学中の思い出—大滝浩」開成会々報復刊第九号21頁所載)の大滝氏開成学園入園期間は昭和七年—昭和12年であり、「数学は内田先生」と所載されているから、先生の開成学園お勤めは正しく右期間中であると云えよう。

そもそも此の開成学園と云うのは、明治初に建てられた加賀藩の「中学校」の分校と云えよう。即ち加賀藩の東校佐野鼎氏、明治四年(二七)東都に出て共立学校を設立されたからである。

是れの建立にたずさわつた人物は、前田慶寧、芳野茂兵衛、宇野富有等、あたかも加賀分校の親があつた。たまたま学校創立者佐野鼎、明治十年(三七)虎列刺に罹り、東都に歿せられた。其時後継者としては、学園前に加賀藩御用商人菅野と云う家の二階に下宿して翻訳生活をして居られた高橋是清と云う人が経営を引受けられて、ここに共立学校復興が始まつた。是れが現在の開成中学校であった。(註)「野訪日記、昭和21・7・20金沢文化協会刊には「菅野の二階」とあり、「開成学園九十年史」には「辻金五郎氏二階」と所載。いずれか誤であらう。

当時高橋は清氏は大学予備門の教授であつたし、若年米國にも渡り、見聞広く、英學通であつた。筆者母校在学中、余暇に此の高橋是清先生伝を内田雄太郎先生から承つたことがあつた。

按うに内田先生一中に於いて、學問の根柢を述べられたと同様に、開成學園に移られても同じく、世界の學問骨幹を強調されたに違いない。

内田雄太郎先生、元海軍教授にて、勲三等、宮中席次は校長の上であつた。母校全校、尊敬の的であつた。

筆者先生の詳細を知りたく八方手段を尽したが、無駄残念でたまらない。乞う。江湖の諸賢先生生涯御教示を懇願して筆を擱きたい。

台湾に残るただ一つの日本人

しかも石川県人の銅像

故小堀保行

(二 中二十六回卒)

昭和六十三年二月四日の東京四高会の席で、丹沢一延氏(四高昭和十七年卒)の講演で自分は人の誠意というものは如何に大きな力のあるものかと深く感銘した。自分丈けで感激しているだけでは余りに惜しい。恐らくこの事実を知っている郷土の方々が案外少ないのではないか、この

誇るべき我等の先輩の輝しい業績を又私の感激をお伝えしたいと拙な筆をとつた。このことを詳述しているのは台湾の作家謝新発の「誰にも書けなかつた台湾」の著で戦時日本の軍國的統治、日本人の台湾人に対する色々の行為を批判している中でこの日本人、八田与一氏だけは一生を嘉南平野の開発に捧げ異国人ながら我等の父と呼ぶべきだと叫んでいる。その八田与一氏は明治十九年二月二十二日石川県河北郡花園村で生れ明治三十七年金沢一中を経て(一中十一回卒)明治四十年四高二部工科を卒業明治四十三年東大工学部土木科卒業同年八月二十四才で台湾総督府土木局技手になった。それから約十ヶ年氏は桃園大圳(圳とは人工の灌漑用の溝)の構築工事に泥まみれになつて来た。この時天から降つたように嘉義厅长等から嘉南平野十四万五千ヘクタールの給水問題を解決してくれと強く要請して来た。

総督府は無下に断りかねて八田技師にこの調査を命じた。氏は大正八年二月から総勢八十余名のスタッフを率いてこの大荒野の隅々まで酷暑と疫病にさいなまれながらも不眠不休でつぶさに踏査し同年十月土木局に土木局も驚いた程の立派な設計書を提出した。即ち一三一キロの曾文溪と台湾一の長い川一八六キロの濁水溪から人工の溝で引水し嘉南十四万五千ヘクタールの荒田畑の欠水問題を解決するプランで工事費約五千万円を要する計画だつた。当時の台湾総督府の年予算が約五千万円だつたからその規模が如何に當時としては大きかつたか総督府開設以来の大工事計画だつた。時の総督は八代目、初めての文官田健次郎氏であつた。総督府当局は勿論難色を示したが南部各厅长の熱心な運動、八田氏の飽くなき熱意田總督の理解ある支持とで遂にこの一大計画は十ヶ年の継続事業として認められたのであつた。八田氏はこの工事に骨を埋める決意でとりかかつた。

この嘉南大平野は台湾の西南に位置し東西七十一キロ、南北八十六キロ、台湾の全耕地面積の四十一・五%強を占める大広野で當時はその殆んどが水利に恵まれず北の曾文溪又は濁水溪から水を引くなどは全く画空事と思われていた。清朝百数十年來特有の長梅雨が綿々として続けば川溝は氾濫して一面の泥海となるかと思えば乾期に入ると砂漠が濛々として天を蔽う有様で又海に近い田畑は海が荒れると田畑に潮がのし上り台風時には常にかなり奥地まで津波が農作物をあつとという間にさらつて行く有様だつた。

八田氏は魔につかれたように家へもよく帰らず嘉南大圳の大工事に没頭した。大正九年九月一日には烏山頭工務所長並びに監督及工務課長に任せられこの大工事の責任を一人で背負つて終つた。氏は工事事務所又は現場に労務者と寢食を共にし為に数千の労務者は氏を親や兄の様に親しみ慕い氏のために犬馬の勞を厭わなかつた。かくて工事は幾多の障害困難を乗り越えて順調に進み十ヶ年の歳月を経た昭和五年四月二十九日の天皇誕生日に遂に落成し彼は三十四才から四十四才の白髪まじりの中年になつて終つていた。

グムの長さは一、二七三米、高さ五六米、底幅三〇三米、貯水量一億三七七立方米、水面面積一三〇〇ヘクタール、南北二本の主な給水幹線九八キロ、支線一二〇〇キロ潮水の防潮堤一〇四キロに及びしかも當時の工事は殆んど人力によつて行われたのでその困難は筆舌を絶するものだつた。かくて農産物の収穫は一挙に四・二倍になり供水区域は嘉義嘉南の二県に跨がり十五万戸百万の農民がこの恩恵に随喜の涙を流したのだつた。氏の徳を慕い一介の土木技師八田与一氏の銅像建設の議が工事関係者主要農民等も八八名によつて自然に湧き上り氏が固辞したに拘らず話まとまり昭和三年工事竣工前に東京で彫刻家吉田三郎氏で作られ

工事竣工の時烏山頭ダムで除幕式が挙げられ氏の努力とその徳をたたえたのだった。

所がここに思わぬ騒動が起った。

この大工事が竣工をするに伴い今迄芋粥を啜っていた農民は一日を争い我先に幹田を又荒畑を水田にかえ白米を鱈腹食べられるようになり在米米を止め蓬莱米つくりで専念し又砂糖原料の甘蔗畑も稲作となり為に製糖会社は原料不足のため経営が不可能になりかけ農民団体との間に確執が高まり大騒ぎとなった。当局や庁役人も収拾に手を焼き遂に八田氏に調停を頼みこんだ。氏は農民代表と膝を交えて協議し所謂三年輪作を提案し遂にこの大騒ぎを静めたのは有名な話だ。これも如何に農民に信望があったの証しである。即ち全区を三区に分ち第一区は砂糖甘蔗、第二区は稲、第三区は雑穀とし毎年交互に輪作することで農民を納得させ製糖会社も承諾し、しかもその結果以前より何れも増収となり両者とも喜んだのであった。

かくて嘉南大平野は一面の豊饒な沃野となりこの地方は農業製糖製紙業を中心に一大発展を遂げたのだが因らざるも昭和十一年日支間に戦火が起り日に月に拡大して遂に大東亜戦争に突入してしまった。

昭和十七年三月我が八田与一氏の

身にも一大異変が起った。工務所長、勅任技師、嘉南大圳水利組合顧問とその時まで身の栄達を離れてこの嘉南の地に身も心も注ぎ込んでいた氏にも木綿作地開発のためフィリピン行きを命ぜられた。農民の涙と万才の喚声に後髪を引かれながら上京し打合の上船で任地に向う途中南支那海で米国の潜水艦のため船が撃沈され無念にも五月八日海の藻屑と消えて終った。当時烏山頭ダム岬で留守を守っておられた外代樹夫人の愁傷は見るに忍びないものがあつたといふ。

八田与一氏の銅像は昭和十九年の金属回収で一旦高雄に運ばれたが運よく熔融を免れ終戦直後嘉南大圳関係者一同が台湾政府に懇願して嘉南農田水利会烏山頭管理処に安置された。戦後島内の日本人の銅像は総督のものを始め全部廃棄処分されたが我が八田与一氏の銅像のみは今も烏山頭ダムの青い水面を見守って百万の農民に守られあがめられている。半世紀にわたる日本の統治の中で八田与一氏ほど台湾を愛し寄与した日本人は幾人あつたらうかと謝新發氏は書いている。

昭和二十年九月一日……この日は烏山頭ダム工事がスタートして二十五周年目に當った。この日奇しくも八田与一氏の次男が復員して帰って

きた。その喜びを家族一同と共にした翌朝未明、太陽がダムの水面に輝いた時外代樹夫人は「みあとしたいてわれもゆくなり云々」の遺書を残して与一氏の銅像わきの烏山頭ダムに和服姿に薄化粧されて身を投ぜられた。この悲報に嘉南百万の農民は勿論新聞で知った島民はあげて「慟哭してやまなかつた」と著者は伝えている。御夫妻の墓は今も烏山頭ダム畔に眠っている。

八田与一氏の大工事の嘉南地区への恩恵は上述の農業開発に止まらなかつた。烏山頭ダムの貯水地は珊瑚潭(台南県)といい、有名な日月潭より広く雄大で其の絶景は台湾屈指で交通も便利なので昭和五十四年から觀光局と嘉南水利会が提携して開発建設がすすめられ種々のレクリエーション設備が完成し、一大觀光地と変貌して今年年間九十万人をこす觀光客で賑い地元住民は莫大な觀光収入に恵まれるに至り八田氏の偉業は嘉南平野の発展と共にその輪を展げ氏に対する地方住民の感謝は其の銅像前のたえざる捧花にあらわれているという。

又著者は「大東亜戦八周年に戰場に狩り出された台湾人は十八万人、軍夫、農業義勇団、通訳、志願兵、徴兵……そのうち三万余は戦没したが、経済大国を誇る日本がそれらの

人に報いたのはなんであつたらうか……思給か？扶助料か？いや梨のつぶてであつたのだ」と書いてある。台湾人の心境が我々の胸をえぐる。その著者が八田与一氏を民族の父と呼んでいる。改めて郷土、同窓の先輩八田与一氏の偉業の尊さを憶う。彼の生国日本政府からは勲章一つ貰えなかつたが台湾島民は彼の銅像を贈り守っているのだ。

短歌

山崎 麗

(通信卒)

一片のはぐれ雲散る風ありて

久しき故郷紺碧の空

黄昏の能登路を行けばシグナルの

光度は増せり日暮る、早し

夕食を終えて憩えば窓に射す

雨の晴れ間に月蒼く輝る

笹百合を暮前に献げ額づけば

胸に浮かび来在りし日の両親

枝たわむぐみの実りは花のごと

季節の移ろひ朱の色に知る

暮らしにはもはや不要と思ひつ

酒場で貰う名入りのマツチ

ジョギングの父子の姿見やりつ、

遠き故郷想ふ日の暮れ

随想

栗田 添星

(一中三十一回卒)

日露戦争、奉天陥落の奉祝提灯行列のにぎわいのさなか、即、明治三十八年三月十日の夜半に生を受け、おそらく祖父長次郎が、戦捷にちなんで、筆者の名を、捷夫(カツオ)と名づけたものと思う。

急流手取川に沿い、やや小高い丘に家が建てられてあったために、朝夕、霊峰白山を眺め、白砂青松の景勝の地、小舞子の海を友として、日本海の怒涛に育まれて育った。

久田校長の精神を受けつぐ桜学校一中に入学、一年の時、全国作文のコンクールに賞を受けた事を覚えてゐる。更に絵画に興味があり、同級生の原田太一(日本画)二中の堀忠義(洋画)等と計り、絵画同好会を創設して年一回、秋にその展示を催した。

その後、筆者は、当時としては尖端を行く表現派(油)に志し、フランス画壇で有名な「ロート」の作品に注目したものであった。

(5) 卒業まじかの四年の冬休み頃は、父が北国新聞の文芸顧問であった関係もあって、一時は新聞記者を志望し、亦、金城画壇に気を吐いた相川松瑞(日本画)とも計って、美術学

校へも望んだものであったが、共にこれらを断念して、技術方面に変更、建築の福井高工か、金沢高工の土木かと、選んで金沢高工の土木に入り、昭和二年朝鮮総督府内務局土木課に進出した。畑違いの依頼をうけて、郡山の在郷軍人会館を設計施工し、斬新な外装を誇って、当時南韓では評判を得たものである。

十五年勤続の後、進められて、海軍省に転官、雄躍、南方第一戦のソロモン群島、ブーゲンビル島に進出、見事その北端に基地飛行場を竣工したるも、B 24(後のB 29)による一ヶ月間の爆撃によって、遂に終戦、然し幸運にも復員するを得、昭和二十一年二月十一日、浦賀港に上陸し得たのである。

戦後は本職の土木建築を基本に、湊工務店を創設、特に数寄屋建築に特色を展開、東京・横浜・湘南地区に三十近くの近代意匠をもった茶室を施工したものである。

「茶室考」として一本を刊行し、理論と實際を公表して、当時他に類のない著作であった。

更に、収集した古文書、とくに茶道に関する茶伝書の解明に努力とその研究を集中して、「酒井宗雅茶会記(姫路二代の殿様)」「茶花作法」「水指考」「茶盤抄」更に「片桐石州の新発見の著作」等、拾

冊余の著作を出版、更に来るべき「利休四〇〇年祭」に対する後世に残る茶伝書の発表に協力すべく平成の新しい時代を迎えた次第である。

(茶道研究者)

あ、！沖繩戦記

普神 益雄

(一中三十七回卒)

私達は二度と再び戦争の悲惨を繰返してはならない。私は悲惨なる戦争参加の体験を回顧しつつ……悲惨なるが故に戦争を否定し、すべての人々がそうであるように、私も亦戦争には心から反対である。即ち国家間のあらゆる問題はすべて常に平和的手段によって解決を計らねばならないし、断じて戦争行為に訴えてはならないことを力説するものである

と共に戦争行動に反対し、戦争を防止するために我等今何をすべきや……を問いかけつつ、この悲壮なる戦記を書きはじめたいと思う。

私は当時沖繩本島守備軍の更に前衛拠点たる南大東島の守備の任にあたっていた。戦局はいよいよ緊迫し日本本土の攻撃近しを感じつつ……やがて沖繩に指向せらるるであろう米軍の大戦団を覚悟しつつ全守備軍は総力をあげてその戦備に寸刻を惜しんだ。

遂に昭和二十年三月一日米軍の大艦隊・陸海空軍による沖繩本島の総攻撃は開始せられた。嘗ての陸軍士官学校に於ける校長閣下、今は幸にも軍司令官閣下としての悲壮なる訓示である「皇国まさに危急なり。全將兵宜しく一人残らず大猷公精神を具現すべし」……祖国のために殉ぜよ……大義に燃ゆるこの司令官の一語に対し、全將兵は唯涙して悲壮なる決意を誓ったのである。

米陸海空の三軍は昭和二十年三月一日、沖繩本島の大攻略作戦を開始した。實際我に倍する兵力と無限を誇る物量の前には最早ほどこす策はなかった。兵士は泥濘ひざを没する悪路を戒衣は裂け肉は破れ、転戦又転戦熱砂を踏む軍靴は鉄鋸も紐もくち果てていた。それでも果敢なる將兵は死地を求めて敵陣深く切り込んでゆくのであった。飢えて食なく、呑むに水なく、潜むに地なく、汗と泥にまみれながら僅かに一滴の草露にのどをうるほして奮戦するのであったが、近代兵器と物量の前にはもはや対応策を見出し得なかった。海浜に流れついた木箱を拾い集めて造った急造爆雷を抱いてM1重戦車に突入する肉迫攻撃隊は火焔放射器のえじきとなって倒れていった。山頂の陣地を死守する將兵は迫撃砲弾に土と共に飛び散り、壕は数多くの戦

友を呑んだまま次々と崩れ落ちてゆくのであった。間断なき五十糧の艦砲は沖繩の山河を震駭し、赤く焼けただれた赤土の上に幾多の将兵と罪なき住民の屍の山を築いてゆくのであった。道という道、橋と名のつく丸太棒まで見る影もなく消え去り、僅かに残った車輛とて動かす所なく、またかくれることを知らない軍馬は見るにしのびない屍を南の原野にさらけだしていた。通信も通信兵の必死の保線の甲斐も空しく次々に切断され、連絡はとだえ、もはやなすべき手段も見出し得なかった。血まみぐさい風にさらされた草木は荒れて声なく、ここ沖繩の新戦場には天祐もなく神助もなかった。ただやるせない疲労と憂いが将兵の胸に深くおおいかぶさってくるのであった。防戦に防戦これつとめた首里戦線も敢斗の甲斐もなく、その精銳の大半を失い、軍司令部を沖繩の最南端、摩文仁の丘に後退するの止むなきに至ったのである。生き残った将兵といえども、あるいは傷つき、あるいは片腕を失い、あるいは片足を失いながらも血にまみれ、泥に汚れ、降り続いた泥濘の道を弾雨に追われながら南へ南へと後退を続けるのであった。深手の負傷者も、あるいは背に負われ、あるいは抱きあいながらも泥田の中を、岩かけの小径をたどつ

てゆく……。見れば繻帯は汚れ、化膿した傷にはうじがわいて生きながらの屍の行進にも等しかった。だれ一人として手当をしてくれる者もなく、果して彼らは一日にどれほどの道を歩き得たであろうか。罪なき住民も財産を焼かれ、家を失い砲煙の中をさまよひ歩くのであった。子は親を失い、妻は夫と別れ、少年少女も幼児を背負つて南へ南へと落ちのびてゆく。勝ち誇つた米軍は幾百の戦車を先頭になだれの如き勢いで南へと迫ってくる。最早退くに地なく、背後には唯死の海……。東支那海が横たわっているのみであった。

戦うこと十二旬遂に六月二十五日ノ刀折れ弾つきて牛島軍司令長官及参謀長は信愛なる残存将兵と共に遙かに東北方皇居を伏し拝みつつ……神州不滅を信じ、欣然として切腹自決した。

かくて沖繩本島守備軍は破れたりと雖も、終始周倒なる防禦戦術と常に毅然たる敢斗精神に徹し、米陸海空の大軍に対処し吾が陸軍及海軍並に住民は鉄の団結のもと……九州等本土空軍の果敢にして壯絶なる特攻作戦と相まって……敵の心肝を寒からしめたのみならず敵の艦船及陸海軍に与えた甚大なる損失は我に匹敵する程のものであり、まさにその作戦指導と戦果は大東亜戦史上特筆す

べきものであったのである……。然し世界に誇る大戦艦「大和」を失ったのも沖繩海戦であった。然りと雖も終戦の最後まで沖繩本島周辺にあって、宮古島、石垣島、南大東島等守備隊が厳然と健在したのも牛島軍司令官の遺徳の然らしむところ……。又特に最後に銘記したいことは、沖繩高等女学校及沖繩女子師範学校の殆んど全校職員、生徒が従軍看護婦として或は伝令、書記、給養部隊等の後方勤務に学徒勤皇隊として参戦したことである。勿論男子学生の殆んども学園から戦場へと参加した。その若き学徒の心情を察するとき誰が涙なしに語り得よう。先般連隊を代表して昭和五十五年四月慰霊のため沖繩本島及南大東島を訪問したとき、そうしてうら若き幾万名の青年学徒の尊き御霊を祀る健児の塔及びひめゆりの塔の前に襟を正し頭をたれて祈りを捧げた時、こみあげてくるあふるる涙をどうすることもできなかった。

そうして昭和六年九月十八日の柳條溝満鉄爆破に端を発した満洲事変勃発から、日支事変へ……更に大東亜戦争へと約十四ヶ年間に亘るいわゆる昭和維新の激動の中で、祖国の平和と繁栄を祈念しつつ散っていった実に約四百万名になんなんとする尊き犠牲者……。静かに顧みれば、私達の先輩戦友達の尊き犠牲の上に立つて、今、平和と繁栄を謳歌しつつある日本！

まさに私達の今後は、この貴き犠牲者に感謝する心から出発せねばならないのではないのでしょうか。

人類の眞の平和なくして、どこに人間の生存意義があるでありましょう。

桜章の思い出

高島三郎

(一四四五回卒)

忘れもしない、昭和二十一年六月二十七日のことだった。

ラバウル引揚げ最終の船で名古屋港に上陸し、引揚げの諸雑務を終え帰郷の列車に北陸方面へ帰還する兵達と共にギューギューすし詰めめの列車に乗り、米原で北陸線に乗り替えてからのことだった。

一般乗客と共にすし詰めの中に立ちつくし、将来のこと、父母のこと、金沢の街並のこと、友人達のことなど、思い出し心配はいよいよつるばかりであった。

戦地へ出発してから音信不通の中で、すっかり忘れていた事等が一度に思い出され、列車のわたちの音のなかで、ただぼんやり沿線の風景をながめていたのです。

ふと前に矢張り立ちつくしている

学生の制帽のわきにチラツと光る星のような帽章を認めたのだ。だがよく見るとそれは私達が卒業した金沢一中の制帽のワキ章と同じ桜ではな
いか。何か熱いものがグツとこみあげてくると同時に、青春時代が思い
出されてくるのであった。

その頃上級学校へ入学しても、金沢一中の卒業生達は好んで金沢一中の帽子のワキ章をその上級学校の制帽のワキに、金沢一中の卒業生であることの誇りをもってつけていたものであった。あまりの懐しさと安堵のため思わず声をかけ「君は金沢一中の卒業生か、俺も金沢一中の卒業生だ」と。

(7) 同窓生であることの懐かしさが一度におそってくるのであった。そこで金沢の街並はどのようになつていくのか、俺の家は寺町の方にあるのだがあのあたりは変っていないか等、矢継ぎ早の質問に、その学生は大変落ち着いた態度で応答してくれるのであった。そのあげく寺町はどの辺ですかと聞かれ、町名を言ったところ、ア！それでは高島さんではないですかと言われ、一瞬ドキツとしたのであった。お宅は御両親共健在です。しかし家は何処かへ移られましたとの事、はて両親健在はわかるが家を移転したのでは帰る処が無くなつた始末。それでももしや人違いで

はないかとその学生の名前を聞くと、それは私も知っているA氏で、昔若い時私の家にいたこともあり、大陸に渡り青島で大成功した人の子息であつた。

私が学生時代に一度、父とA氏と三人で湯涌の白雲楼へ一泊で静養に行つた時、青島の話の中で「青島の県人会の主だった人たちは金沢一中の卒業生であり、私は学校も出ていないので肩身のせまい思ひであつたが、息子が金沢一中へ入っていると
言つて溜飲を下げています」とのことであつた。その御子息とは、あまりの奇遇におどろくと同時に、帰宅すべき家不明ということになつてしまつた。いろいろ尋ねても御本人は横浜の学校へ行つていて、金沢へは時々帰るだけでくわしいことは御存じがないのは当然であつた。

もしなんなら私の家へ来て移転先を調べてからでもと言われるのであつたが、エイツまよとばかり金沢駅で別れたのでした。それから尋ね尋ねてようやく帰宅し、両親と涙の対面も済ませ雑談中、前記のA氏からお祝いにと見事な鯛を頂戴した次第である。

以上の復員婦郷余話を「桜章の思い出」として一文を綴つた次第であります。

A氏及びその御子息に栄光あれ。

ルソン島、マニラへ

(我が太平洋戦記その6)

片岡 茂太郎

(一四四十六回卒)

昭和十九年八月月上旬、マニラの第四航空軍司令部から復員の命令を受けた高田技術中尉(金沢一中一期先輩)と私(軍医少尉)はパラオを発ち、フィリピン、ミンダナオ島、ダバオに向う駆潜艇に便乗していた。サイパンは既に玉碎し、ニューギニアも亦各所に優勢な連合軍が上陸、補給を絶たれた我軍は悲惨な敗退を続けていた。マッカーサーの次なる進攻目標は間違いなくフィリピンであらう。

駆潜艇は単独航行の身軽さから可なり的高速をだしているようだ。後のことになるが、九月十五日米軍はパラオ諸島、ベリリユー島に上陸し、珊瑚礁の洞窟に立てこもる約一万の我軍将兵との間に壮絶な戦闘を展開、米軍も局地戦としては他に類を見ない一万余の死傷者を出した。死闘一ヶ月余我軍は遂に玉碎するが、戦い終つて島に上陸したアメリカ太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥は日本軍の敢闘を讃え、碑を建てている。碑文を訳すると「この島を訪れる諸々の国の旅人たちよ、日本の国をよぎることあらば伝えよかし、この島

を全員死して守つた日本の将兵の勇氣と祖国を思う心根を」とあつた。敵味方の立場を越えニミッツ提督の言葉には人間として私達の心をうつものがあつた。

明け方近くであつたらうか。突如「ジャン、ジャン、ジャン」というけたたましい鐘の音に飛び起きた。何事ならんと未だ薄暗い甲板にでると海軍さんの曰く「敵潜水艦の魚雷攻撃を受けたが、船の下を通つていった」と。小さな駆潜艇の吃水が浅く、魚雷の深度が深かつたために一瞬の轟沈を免がれたのである。ダバオ湾口には敵潜水艦が何時も待ち伏せをしていてこれまでも多数の日本艦船がやられていた。私達は全く幸運であつたとしかいいようがない。やがて空が少しづつ白みはじめ、岸辺の椰子のシルエツトがその輪郭を露にしてきた。午前六時頃ダバオの波止場に着く。

ダバオの町は戦前からマニラ麻の栽培で在留日本人が多く住んでいて、将校宿泊所の世話をしていた老夫婦もかつて大きな農園を経営していた。速飛行場に連絡をとりマニラへ行く4航空軍の飛行便があつたら知らせて欲しいと依頼する。

ここには他にも便待ちの将校が四五名滞在していた。連絡を待つだけ

の無聊のまま街に出かけることにす
る。中心街の通りは一見西部劇にで
てくる町を思わせるような木造の建
物が軒を並べ、町はずれには僅かば
かりのバナナ、パイパイ、マンゴー
等売っているバラック風の小さい
家が目につく。人々の身なりもみす
ぼらしい。この国も貧しいのであ
る。

ある日のこと一人街をぶらぶら歩
て行くと向うの方からきた水兵が私に
敬礼をした。見るとなんと野崎の基
まではないか。向うも気がつき驚き
と喜びとをこっちゃんませにした顔に
なっていた。私の子供の時分から毎
日天秤棒をかついで廻ってきていた
魚屋である。(本名は中川基助とい
ったが野崎という魚屋で働いていて
この時三十七、八才位であったと思
うが甚まという愛称で呼ばれていた)
聞くと召集されつい最近このダバオ
へ派遣されてきた海軍設営隊の二等
水兵で、今日は偶々外出許可がおり
たのだという。

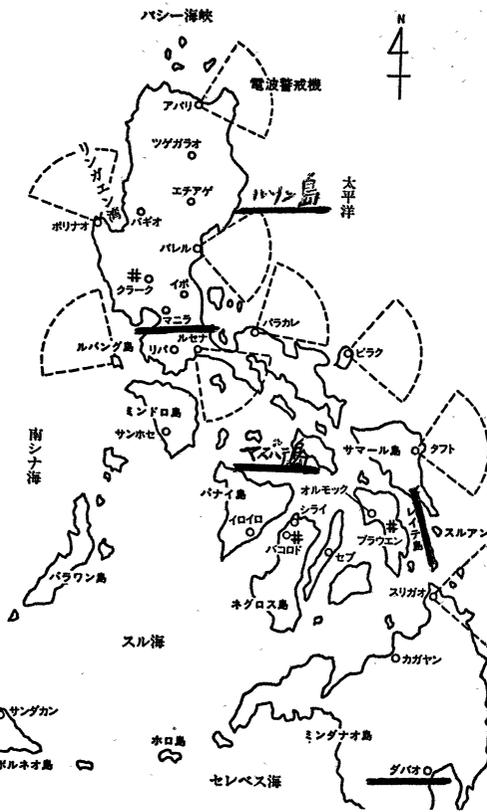
この年で最下級の水兵、さぞ苦勞
していることだろう。こちらはチヨ
ンガだが彼には確か奥さんと小さい
子供が三人いる筈、せめて今日一日
慰勞してやりたいものだ、なんだ
か胸を締め付けられるような思いに
させられる。道々話を聞いたり、聞
かせたり、合い間には喫茶店のよう

な所に入ってものを食べ終日行を共
にした。帰隊の時間がやってきて別
れる時彼は実に名残り惜しそうであ
った。

戦後復員してきてから私達が一緒
に歩いたその約三ヶ月後に彼が戦死
したことを、そして私と出會つて本
当になつかしかったと書いた手紙が
届いていたことも奥さんから知らさ
れた。戦争の非情さをつくづく思
う。

ダバオに来てから既に一週間経つて
いた。毎日飛行場へ問い合せるがな
なか便がないようだ。高田中尉と相
談し、ここは海軍の飛行場であるし
こんなことをしていても駄目だから
行場に泊り込んで掴まえようとい
うことになった。

比島方面レーダー配置要図



迫りくるフィリピン決戦に備え、
ダバオの飛行場には海軍の零戦が多
数集結していた。飛行場へ来てから
三日目の朝、見馴れた第7輸送飛行
隊の輸送機(呑龍)が一機着陸し、
数人の将校が降りてきた。見るとそ
の中の一人が半年前ニューギニア、
ウエワクで一緒だった軍医部の山口
少佐である。飛んでいつて敬礼する
と「こんなところで何しているんだ」
と半ば詰問調である。それでここに
いる訳をかいつまんで話すと、一行
の長、渋谷参謀に掛け合ってくれ、
同乗させて貰うことになった。(一
行は来るべき航空戦のためフィリピ
ンの各島に造成中の飛行場視察のた
め飛来したのである。)

輸送機は離陸し、しばらく飛んで
ネグロス島の広大なパイナップル畑
に続く未完成の飛行場に一旦着陸、
あちこち見てから再び離陸、レイテ
島のタクロパン飛行場に着いた。一
行は司令部のあるマニラへは直行せ
ず、他の島を廻るといふことで私達
二人はここで降りることになった。
タクロパンの飛行場も見るとに慌
しさが感じられ、多数の4航軍隷下
の飛行機が雑然と集まっていた。戦
いの真近に迫るを感じる。

その日は飛行場脇の宿泊所に泊る
ことになり、その二階への階段を昇
りかけた時上から降りてくる顔に見
覚えがあった。向うもおやという顔
つきになった。忘れもしない九ヶ月
前、病院船ぶえのすあいれす丸が撃
沈され、太平洋をボートで一週間漂
流した時私と膚をくっつけあつてい
た隣りの彼である。あの時は傷病兵
の白衣を着ていたし又明日をも知れ
ぬ絶望的な状況の中、あまり言葉
を交わすこともなかったが見ると曹長
で飛行戦隊の整備士とのこと、内地
送還はさせて貰えなかつたらしい。
再会をなつかしみ肩を叩いて別れた
が果して生きて帰れたであろうか。
翌朝早くから飛行場へ行き便を待
つ。高田中尉と話し合つてここで別
個の行動をとることにする。その方
がお互いに都合がよかったからであ

る。

何時頃だったろうか、一機の九九式軍偵察機が飛来し着陸した。操縦士が駆け足で何処かへ連絡にゆき再び戻って来た。このチャンスとばかり駆けより、若しマニラの方へ行くのなら乗せてくれないかと頼み込んだ。その若い二十才位の軍曹はいとも簡単に「ああ、いいですよ」と快く承諾してくれるではないか。

複座の偵察機の後部座席に乗り込むと「いいですか」という声と共にプロペラが廻り、七、八百米も滑走したかと思うとスイーと飛び上った。輸送機に比べると実に軽やかだ。高度三千米位だろうか、風防を開けて下を覗くと、物凄い勢いで風が顔にぶつかってきて思わず首を後ろに廻す。南北に延びるマสบテ島の海岸に打ち寄せる白波の帯がゆつくりと後ろの方へと流れてゆく。これから先何が待ちうけているか知らないが戦いの合い間にもこんな胸の脹らむひとときもあつたのだろうか。

ルソン島が見えはじめ、やがて機はマニラのニコルス飛行場に着陸した。私は名前を知らない若い軍曹に札をいい、今後の武運を祈る思いで手を握って別れた。

復帰命令を受けてから約三週間漸くマニラに着いた。ともかく4航軍司令部に連絡せねばと地区司令部へ

行き軍用電話を借りる。電話口にてたのは庶務の准尉で、五味少尉が迎えにゆくからそこで待っていて欲しいとのこと。待つこと約三十分今年の二月ニューギニア、ウエワクで別れた同期の五味少尉が車で来てくれた。車中その後の積る話をしているうちに司令部に当てられているフィリピン医科大学の建物に到着。早速高級軍医吉見中佐に申告をする。軍医部長は出張で留守であった。吉見中佐に連れられて参謀長、高級参謀、高級副官と順次申告に廻る。

後天王山といわれ、約八万の我軍将兵が苦闘の末散華するレイテ島決戦が間もなく始まろうとしていたのである。

金沢一高三年生

吉竹 毎 謳

(二中五十四回卒)

昭和二十三年三月、学校令改正により旧制の中学廃止となり、四月より新制の高等学校が発足したのにもない、金沢一中も金沢第一高等学校と名称が変更され、第一高女が第二高等学校(現在の二水高)金沢三中が第三高等学校(現在の桜丘高)となった。そこで一高の三学年は旧

は、昭和二十四年六月頃宮沢先生が一中の桜章の紋と東京一高の柏章を組合わせて図案化したものである。

道 草

松村 晴夫

(泉丘三回卒)

「なべて頂に憩あり」と西欧の賢人が記されたそうですが、特に頂を極めなくてもささやかな安心と憩は身近かあるようです。子供の頃、道草をして見た空の美しさ、川の流れの自然さ、田園の景色の閑閑さは、年と共にかえって鮮かさを増して想い出されます。勉強や学校からの開放感がそうさせたのでしょうか。そして現在の私にとって、本業を離れて続けている趣味の能楽や書道は人生の道草と言えそうです。

大河校長は旧四高の教育と伝統をここに受け継がせようとする意図があった様であるが、生徒諸君はそれに応えようとしたかどうか不明である。スポーツはとにかく三中学の主力の混成であるので、県内に於ては抜群に強かった様に記憶している。とにかく一ヶ年間だけの付き合いの為馴染が薄く、卒業三十年間は同窓会名簿もなく、同窓会も行われなかったのであるが、昭和五十四年一泉同窓会名簿作成の時始めて卒業時の住所録をたよりに名簿を作り同窓会を発足させ、それ以来現在まで三回同窓会を開くことが出来た。ちなみに當時より泉丘に引き継がれている校章

って来ます。あの時が、大袈裟に言えは私にとつて能楽への開眼になつたと思つて居ります。その後中断したこともありすが、開業後再び能の観賞や謡や仕舞の稽古を続けて居ります。その後、書道も家内と共に楽しんで居ります。余り上達しませんが、しかしそれでよいと思つて居ります。人生の道草ですから自然に自分の気持の赴くままに、下手の横好きなのがかえつて永く続いて居るのだと思ひます。

今から思うと、私は若い時に思いがけなく能のすばらしさを意識する程の強烈なインパクトを心にうけました。それはおそらく心が若かつたから強く感激したのかもしれない。それ以来今迄、ささやかながら道草しながらやつて参りました。そしてつくづく若い頃にこのような機会を持つたことをありがたく思つて居ります。

「泉寿会」よ永遠なれ

河島 和子

(泉丘十回卒)

昨年八月十三日、金沢東急ホテルにおいて、卒業三十周年を祝う同窓会が開かれた。

当時の先生方にも多数ご出席いただき、そのお元気なお姿に接した私

達は、なつかしく感激もひとしおであつた。

同級生達も、全国各地からお盆休みを利用して帰省し、総勢一六〇余名の大盛況となつた。なかには三十年ぶりの再会者もあり、一次会だけでは話が尽きず、二次会、三次会へとネオンの中に散つていった。

普段の夜は若者達で賑わつている香林坊界限も、この夜ばかりは「貸切り泉丘様」「泉寿会様予約」と張り紙をした店もあり、まさに「泉丘一色」に塗りつぶされたパーティーぶりだつた。

私達の「泉寿会」は、泉丘一〇期生一五二名と通信教育一期生二名からなる同窓会で、金沢に本部を置き、関東泉寿会、関西泉寿会の二支部を持つてゐる。卒業二十周年を迎えるにあたり、卒業以来個々のいくつかのグループで継続的にもたれてきたミニ同窓会を一つの会にまとめてみてはどうだろうか、との提案のもとに、同窓会の組織づくりと名簿の作成をはじめた。「泉丘高校もわれわれも、幸多くめでたくありたい。泉が寿く、良いことだ」ということで、泉丘一〇期生の同窓会は「泉寿会」と命名された。二〇年のプランクはそのまま名簿作りに歴然とあらわれた。名簿には空欄が多い。しかし、これを機に泉寿会では、会員が年会

費二千円を納入し、本部からは「泉寿会」の定期通信のみならず、泉同窓会の機関誌「一泉」をも送付することによって広く同窓会への参加を呼びかけながら今日に至つてゐる。二十五周年には、名簿の再編にはあきたらず、「座談会 青春讃歌」「思い出の記」を内容とする記念誌を発行した。そして、昨年の三十周年記念総会では「泉寿会」「関東泉寿会」「関西泉寿会」の三本の旗が作られ、「一泉同窓会」の旗とともに会場に掲げられ、総会を盛りあげた。五〇〇余名で発足した「泉寿会」も、卒業後三〇年で一八名の同朋を喪ひ、総会も追悼で開会した。しかし同窓会の絆は強く、現在消息の不明の友は、わずかに二〇余名に過ぎない。

一九五八(昭和三三)年に母校を巣立つとき、三十年後の今日まで、こんなにも親密な仲間意識を持つた同窓会が続けられるとは、想像もしなかつたことである。

卒業アルバム編集後記に、次のような一文がある。「今年、みんながそれぞれ自分自身の理知と情熱に基づいて、未知の世界へ新しい第一歩を進める年だ。お互いの多幸と健康を祈ろう。そして、この泉丘三ヶ年の生活が、いかに希望と感激に満ち、美しい人間形成の場であつたかを思い浮かべ、永遠の友情をこの

学園にとり結ぼう」と。卒業からすでに三〇年の年月を過ぎた私達ではあるが、今、このメッセージを受け取つても、さほどおかしいとは思われない。

敗戦の翌年、一九四六(昭和二一)年春、小学校へ入学した私達、確かに戦後教育の第一回生である。しかし心の中には、戦前派でも戦中派でもなく、胸を張つて「戦後派です」とも言えない中途半端な私達は、それが生き方にも現われて、うまくイスイと世渡りが出来ずにいる。

せめて心に溜つたウサを晴らそうと、仲間の顔が見たくなり、声が聞きたくなり、たびたび同窓会を開くのである。

先日も泉寿会本部では常任幹事が集まつて新年会を催した。毎年一月の最終日曜日に開かれる関東泉寿会に、今年もまた、泉丘時代の恩師と全国各地から何人かの仲間が出掛けていくのである。秋には、関西泉寿会の例会もある。

同じ場所、同じ時間を共有した友達との絆は、人生八〇年になろうとする今日だからこそ、なお一層強いものになつていくのであろう。

同窓の集い

◇一中八桜会

台風十三号も南にそれ、彼岸入りの九月二十日昭和六十二年度八桜会大会を愛知県犬山市の迎帆楼において開催した。日本最古の国宝犬山城は本年築城四百五十年にあたり、まことに秋晴れの好天氣に恵まれた一日であった。惜しむらくは古稀を過ぎた老武者のため、ドクターストップにより旅行を見合わせた級友が多く、当初の予定を大幅に下回り僅か十九名の参加に止まったことは大変残念であった。

午後二時受付開始、各自市内散策の後、四時半大会を開き、今年逝去された照田、中西、小林、高桑君の冥福を祈り黙禱、地元山本幹事寄贈の一中応援旗の下、ケンケンガクガク、我等未だ若しの意を強くしたが、如何せんいずれも老令のため、来年度以降の大会は金沢市内において開催、然も夫人同伴との意見も出たが、結論は再度金沢において協議することとなった。

(11)

夜は木曾川に舟を出し、伝統の鵜飼を見物、鵜の妙技、鵜匠の説明に耳を傾け、歓談数刻時の経つのを忘



れる程であった。船中で女中曰く、「団体のお客さんは歌が出るのに皆さまのお話に夢中になられ、余程なつかしいのでしようね」翌日明治村において解散したが、金沢組はさらにリトルワールドも見物されたと聞いてゐる。

出席者

- 「関東」 田中、福田正次郎、谷内、八牧
- 「関西」 勝木、坂、能木場、八十島
- 「東海」 三上、山本
- 「北陸」 浅井、高崎、中島、野村、福田尚造、宗広、本村、箕打、三谷 (三上記)

◇三々会越前海岸周遊大会

(一中三十三回卒)

五月十日好天に恵まれ午後山代温泉大野やに集合、北海道・東京・長野・金沢から参加したのは男子十八名、夫人五名なり。

記念撮影後六時から総会、続いて懇親会、三々会提唱の近藤君の発声で乾杯開宴、物故者の黙禱後待ち兼ねた関口君のテープ持参の舞踊、川西君の渋い喉の謡曲に始まる堂々たるもの、米林君の唳々たる横笛はやがて人間国宝級なるべし。次いで門野君の本会に寄せた詩を三々会讃歌として唄う(角力部の応援歌の節をつけた自作のもの乍ら皆で唄えば面白い)。

①古巣出てから

リンリンサイコロリンサイ
六十七年ぢや
ヨンコロリンコロリンサイナ
昔の紅顔

リンリンサイコロリンサイ
心はア若い
ヨンコロリンコロリンサイナ
山代のー三々会

②揃たそろオタ

リンリンサイコロリンサイ
話もオはずむ
ヨンコロリンコロリンサイナ
呑めや唄えや
リンリンサイコロリンサイ
娛しやア今宵
ヨンコロリンコロリンサイナ
来年も北陸か

来年もー北陸か
続いて先生讃歌を唄ったが、昭和六十一年九月一日の「一泉」第十二号で藤田君が歌詞を報告している。数年前吾々はホテル並みの新校舎を訪ねて、余りの変りようにガツカリして、やはり小使が古い硝子窓を明けてチャンチャン鐘を叩いた頃の多くの杜を偲んだ唄と御承知願いたい。この歌で先生が偲ばれ、友の思い出が重なって思わず最後に目頭が熱くなる。他人に判らぬ吾々の学年だけの宝である。又皆で斉唱出来るのは

回首既歴五十年
往時紅顔今白髯
不知来年幾人会
拳觴歌哉今夕宴



これと最後の校歌だけである。小寺君の笑曲斉俊坊の演ずる奇術の数々はさすが、老人ホームで磨かれたか、年々に腕が上る。近藤君の鶴さん、亀さんも重役芸なり。其うち皆の感想が届く、皆八十才の峠に達した感慨が主だったが、それにしても皆若い。

翌朝小雨を衝いて出発したが、越前和紙の会館で熱心に明治以来の吾国の古紙幣の歴史を聞く、外に出れば雨上がりの新緑の森に翻える鯉のぼりが誠に美しく懐かしかった。パピルス館で各自が色紙大の木の葉入りの記念品を作った。宮崎の陶芸村で越前と備前の古陶を見て、武生から越

前海岸の岩礁を眺め乍ら北上し「越の本陣」で最後の海の幸を、ゆつくりと心ゆくまで味わい、福井駅で東京組と再会を約して別れる。本会も当初は東京・関西・金沢が夫々にスケジュールを建てて、交互に運営したが今後は金沢中心でと一任された。

同期の旅

川西 弘晃
(一中三十三回卒)

身二つを欲しとぞ思ふ授業日と

同期の友らの旅と重なる

恙あり障りのありて去年集ひし

七人の姿今年は見えず

加賀温泉三首

そこばくの報酬得んとヌードシヨウに

誘ふ仲居の生活きびし

ヌードシヨウホテルの内と思ひしを

仲居導く夜の温泉街

ヌードシヨウはダンスならざりきと

帰り来てため息深し

老いたる友は

越前の旅八首

味真野の皇子の賜びにし花筐

持ちて狂ひしをみな徳ばゆ
(味真野への道標見ゆ)

味真野は継体天皇が即位前に世を忍ばれた所である。謡曲「花筐」に依る。

はめ込みし紅葉おもむろに色冴えて

わが漉きし和紙乾きゆくなり
(和紙の里)

水仙の名所と聞けど季遅く

越前海岸草みどりなり

わが亡姉に面輪の似たる親友の

妻なり夫妻をカメラに納む

呼鳥門その名ゆかしき巖門に

夫妻立たしめシャッターを切る

お父さん!と友に呼びかくる妻のあり

若葉うるわし同伴の旅

笑ふ者鬼のみならじ来年の

旅を語らふ八十路の友ら

来ん年も命長らへこの旅は

続けんものぞと去り行く友ら

出席会員も毎年減少の傾向あり、当分は北陸地方で開催し、今後四、五回を目途として又考える事とした。(井口記)

◆清流に時の流れを見る

三五会六十周年記念総会

山中、鶴仙溪のほとり、よしのや依緑園で五月十五日、三五会は総会を開いた。

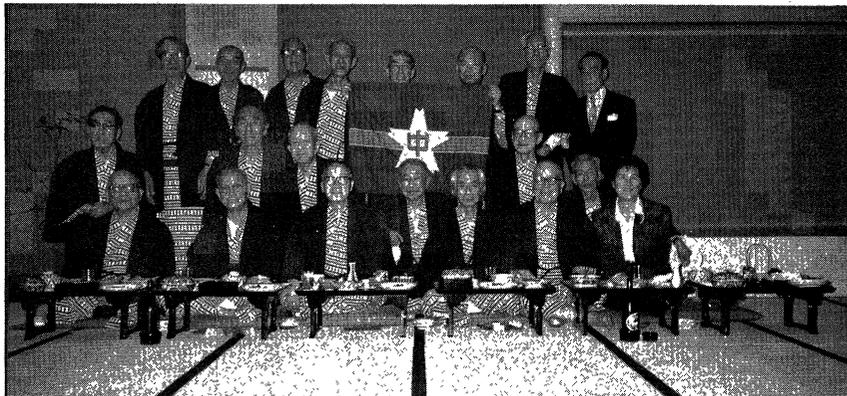
毎年五月金沢で総会を開くことにしていたが、今年は卒業以来六十周年を迎える記念の総会だから一晩ゆつくり語り合おうではないかということと温泉地を選んだ。

関東・関西から駆けつける者もあつて集う者二十名。四時から既に幽界にある友、九九名の追悼法要がしめやかに行なわれた。

現存者六八名となった現在では、物故者の数が一四五%と遙かに上廻り、お互い見合わず顔にもすっきり老いがしのびよっているのは否めない。

然も今日の会場に出たくても身体の都合で出席出来ぬと知らしてきている者が相当あり、今更ながら淋しさを隠すことが出来ない。

六時から宴会、各自から現況の報告などあり、飲みや歌えやの賑かさはなかつたが本多の森の五年間の生



活のつきぬ思い出話に花が咲いた。
 『雲に聳ゆる白山の……』の校歌
 を同窓会事務局から借りてきたテー
 プに合せなつかしく斉唱し、散会し
 たのが九時。宿の女中さんも「若い
 人の会よりも長い時間だった」と感
 心する程だった。

当日の参集者つぎのとおり。

出席者

浅地忠、板垣吉兵衛、牛塚藤雄（宝
 塚在住）内田嘯太、金岩明、小坂音
 次、作本秀雄、桜井喜文、清水忠次
 郎、南部貞一、福田重一（東京在住）
 松村博（富山在住）安原一郎（栃木
 在住）脇水利勝（東京在住・奥様同
 行）野村忠、大浦喜三郎、杉野啓、
 結城与久、大森玄楽

◇七桜会全国大会

（昭和七年辛）

九月二十一日秋晴れのよい天気と
 なり、七桜会全国大会を迎えてくれ
 た。

今回は丁度一中創立九十五周年の
 年に当り、私達も卒業五十六年目と
 なる。

午後二時半金沢駅前に関東、関西、
 九州より十一名、地元十六名が定刻
 前から顔を揃える。久しぶりの再会
 で懐かしさ一杯互いに喜び合う。突
 然入院中の宮野宗一君がみんなに逢
 いたい一心から病院より馳けつけて
 来た。

一行は迎えのバスでいよいよ会場
 へと一路能登路を北上し、千里浜な
 ぎさドライブウエーを通り怒涛逆巻
 く日本海も今日は風の静かな海であ
 った。ありし日の金石原頭の角力を

思いだす。

車中は想い出話に花が咲いている
 うちに四時すぎ会場の和倉温泉ホテ
 ル「たな嘉」に着く。能登島を目前
 にし、静かな七尾湾に浮かぶ小舟の
 風景は実に穏やかで心を慰めてくれ
 る。

六時に一中応援旗をバックに記念
 撮影をして大会に入る。

まず逝きし学友八十四名を追憶し
 心から冥福を祈り黙禱す。又病のた
 め残念乍ら出席出来なかつた学友の
 快癒を切に祈る。

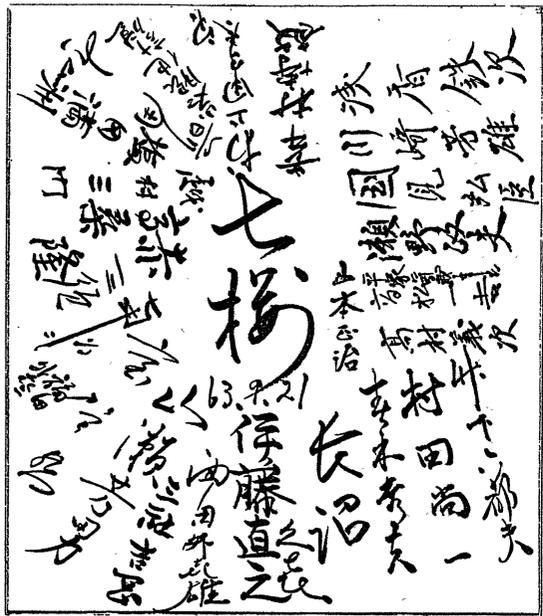
一期一会の今日の集いに出席出来
 た幸せを痛感し、平均寿命にいよいよ
 よ到達する私達、今後の余生の第一

歩と思いを新たにす。

懇親会に入るや、小唄「白扇」長
 唄「鞍馬天狗」詩吟と渋い披露があ
 り、宴益々酣わとなるや同窓会本部
 より持参した校歌、応援歌のカセツ
 トテープが鳴り出すや俄然校章健児
 当時に蘇がえり大合唱となり、三時
 間におよぶ楽しい懇親会も終る。

翌朝九時バスでホテルを出発、能
 登島大橋を渡り島を一周し巖門を廻
 って一時四十分無事金沢に到着する。
 後ろ髪をひかれる思いで互に又の
 逢う日を期し解散、帰路につく。

波乱に満ちた時代を過ぎた我々七
 桜会健児に幸多かれと祈念して乱筆
 を止める。



金沢一中七桜会全国大会 昭和七年九月二十一日 於金沢温泉にて



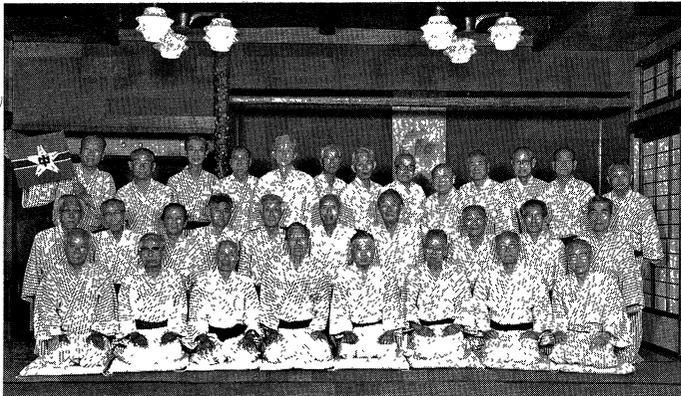
出席者

伊藤、越村、瀬野、赤、高松一、高村義、竹下、前田弘、村上、山本正幸村、浅香、岩脇、川崎、国見、塩田、高桑、長沼、西田、春木、福田、三須、南、村田尚、室賀、吉岡、山瀬

昭和六十三年
八桜会全国大会

日時 七月十六日(出)・十七日(日)
場所 犀川上流 末町滝の荘
参加者 三十名

(関東) 坂木登、田中正能、橋本正久、谷内上、渡辺六郎
(関西) 勝木竜猪、千田民夫、坂伊之助、八十島健二
(中京) 三上修三、山本辰雄
(富山) 織部道雄、沖野永光、土屋



紀一
(地元) 相川実、栗野利雄、大沢正夫、大村孝一、小堀広、小松英吉、越守茂典、高崎辰夫、中島正肇、野村潔、橋本俊一、福田正秋、三谷実、本村尚、箕打正寿、福田尚造(以上)

幹事 箕打、小堀、福田

遠来の友と金沢在住の仲間らが一年ぶりの再会を心から喜びあい、あれやこれやの懐旧談にうち興ずること程、純一無雑の楽しみは他にない。黙禱してご冥福を祈る対象が年とともに多勢となるのは、悲しいながらもやむを得ない。我やさき他人や先：ひたすらすなおに受け容れるのみ。親しかった友の消息などに始まり、レトロ好みのよもやまの懇談も尽きる頃、誰からとなく「百鳥さえずる春くれば／浪も花咲く河北潟……」や「憶えば去年のみなづきなかばに／敢なく桜浜風に……」だとか「春白山の峰の雪／秋犀川の淵の水……」といったたぐいの応援歌や部歌や校歌の一節が口ずさまれるなりゆきともなれば、今は昔の青春時代前期に属するもろもろのイメージが雲のように去来してやまず、夢多かりし Good old days を一挙に手もとにたぐり寄せるにも似た懐かしい追体験に、一刻千金の思いを共有できるわ

けである。
友あり遠方より来たる、また愉しからずや。
年に一度の同期諸君との出会いこそ、なにもものにもまさるわれらの健康保持の妙薬ではなからうか。来年も亦、万障をおしのけて大挙して参会あらんことを、今から鶴首して待つ。

(S・F)

四十・四十一回生の本多会

三月四日(金)大阪南にあるレストラン「乃呂」で、五十七年十二月



の初会合から数えて、七回目の本多会を開催した。いつもの通り出席者は僅かに六名だけ。初会合に十名も出席したのが夢のようである。しかし会えば昔の想い出話や近況など、賑やかに楽しく語り合った。

今回は久しぶりに吉川君が珍らしく出席した。当会の会長である八十島君が、正に半世紀の五十年間を一筋に、竹中工務店に勤務し立派な功績を残し、三月末で副社長を退職し、引き続き特別顧問として勤務する予定であると言われている。大変永い間ご苦勞様でした。今後益々健康であることを祈ります。本日の出席者は能土場俊吉、千田民夫、八十島健二、吉川健太郎、三浦繁雄、小泉茂吉。

十 桜 会 (一 中昭和十年卒)

毎年恒例の十桜会総会も十七回を迎え、本年は和倉温泉のホテル美湾荘で行った。

久方振りにお三方の恩師宮沢先生、藤田先生、塚野先生の御来駕を戴き、又級友も初参加の八百(久)君、結城(善)君や、大患を無事堪え抜かれた中側君、玉村君も夫婦同伴で元気な姿を見せ出席者は五八名とかつてない盛会となった。



本年は全員金沢駅前集合し、チャーターしたデラックス観光バスに同乗して絶好の秋晴れの能登路を和気あいあいの中に一路和倉の会場へ直行した。

総会は例により梶川会長の歓迎の挨拶、幹事が今年の経過と会員の動

静を報告したが、先ず今春榮ある叙勲を授けられた藤田先生を始め左記諸兄の榮譽を讃え慶びをわかしあつた。

然し今年は残念乍ら吉田正一君、

加藤直二両君が他界された。とりわけ吉田君は十桜会創会当初から皆出席の常連で人一倍交友の情厚く、飾らず、気どらず、談論風発、飄々としたあの面影が偲ばれて、一同両君のご冥福をお祈りするとともに御家族の御多幸をお祈りした。

栄ある叙勲者

記

勲四等瑞宝章 藤田誠一先生
勲四等旭日小綬章 中井 忠則兄
勲四等瑞宝章 山崎大喜男兄
勲五等瑞宝章 中側 尚英兄
銀杯一号 十河 義郎兄
(戦時中に勲四等綬章済)

塚野善蔵先生は五十四年に勲三等旭日章綬章済

故吉田正一君は没後正四位勲三等瑞宝章を綬章

物 故 者

吉田正一 六十三年三月四日

心不全

加藤直二 六十三年六月六日

筋萎縮側索硬化症

合掌

懇親宴では宮沢先生、藤田先生、塚野先生より夫々懐しい当時の思い

出話や心温まるお言葉を戴き、又故吉田正一君の御夫人道子様が長男顯信君を同伴されて、席上お二人より鄭重な御挨拶とお礼の言葉を述べられた。

引き続き古沢関東幹事の乾杯で開宴となるや久闊を叙し席の暖まる間もなく思い思いに席を立って交盃を重ね、白髪禿頭の老勇も昔時に帰り談論風発、校歌、応援歌の斉唱やカラオケと大いに盛り上り沖野関西幹事の万才三唱でお開きとなった。

翌日は又全員観光バスに同乗し、中能登の名勝・名刹を探訪し、次回の再会を約して金沢駅前で散会した。尚来年は関東地区幹事のお世話で十月中旬箱根で開催することに決つた。

出席者
宮沢先生、藤田先生、塚野先生、中側夫妻、鴻野夫妻、柿木夫妻、玉村夫妻、坂本夫妻、葛西夫妻、諸江夫妻、故吉田正一夫人・御令息、上島山崎、山本、中谷(外)久保田、久保木、雄谷、西村、古沢、八百(久)中野、酒井(正)沖野、今井、二口、浅本、東、出野、井口、小川、梶川、桜井、久間、槻、小林(幸)駒居、柴野、高木、高島、玉井、寺島、中井、宮川、八尾(孝)室木、結城、吉村、細木、舟田 以上五八名

(諸江記)

四 四 桜 会

(一中昭和十二年卒)

「本多の森」校舎最後の五年生として巣立ってから、五十年の歲月が流れた昭和六十二年十月十四日、久しぶりに四四桜会のメンバーが、加賀の温泉郷山代温泉・百万石に集い、旧交をあたためた。

この日関東、関西と地元から参集した者は三十九名、戦前、戦中、戦後と生き抜いてきた面々だけに、その顔には六十有余年の年輪がきざまられて、それなりの風格もそなわり、白髪、禿頭の好々爺ばかり。

最初に全員で記念撮影をおこない、吉村幹事の司会で、先ず今は亡き六十一名の学友のご冥福を祈って黙禱をささげ、続いて世話人を代表して

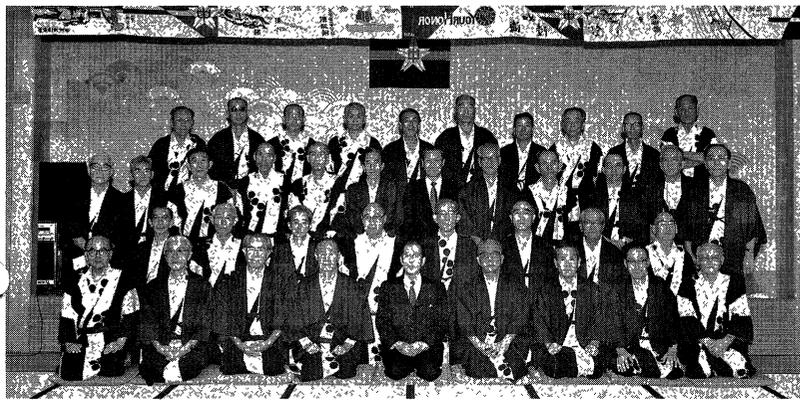
本多幹事の挨拶、遠来の友古西氏（東京在住）の音頭で乾盃、懇親に移った。

卒業以来はじめて会ったという者もいて、つもるよもやま話に時の過ぎるのも忘れての談笑組、歌の得意な山長氏のリードで「南征の調べ」「桜が森」「各部の応援歌」等と、

なつかしのメロディーに乗っての合唱、カラオケで自慢の「のど」を披露する者……多士濟々。気持ちは



一気に五十年前にタイムスリップして、往時を偲ぶなつかしい雰囲気につつまれた。話は尽きないが、最後は大広間の中央に円陣を作り、がちり肩を組んで校歌を合唱、しめくりに高岡氏（大阪在住）の音頭で、お互いの健康と再会を約して万歳を三唱し閉会となった。



卒業五十周年(昭和六十三年) 桜誓会(一中四十五期)の集い

卒業五十周年は年令のうえから人生の大きな節目：一つ盛大にやろうということで四年程前から色々考えアンケートをとったり、あれやこれやと考えたのが旧校舎跡地に記念植樹をして能登観光を行い和倉の加賀屋渚亭（夫人同伴）で総会を開催しようということに決定した。

当初五〇名の参加予定であったが直前近くなって欠席の通知をうけ出席三十九名（夫人同伴二組）となった。十月十四日午後二時本多町の旧校舎跡地に集合、夜の会合にはどうしても出られないが皆の顔を見たいと淡中章二君、倉澄君もかけつけてくれた。記念の桜の若木を本多公園中村記念館前から県立美術館への昇口道わきへ全員がスコップで少しづつ土をかけて終る。そのあと昔の思い出をあちこちに思いめぐらせて跡地を散策往時を語り合う。そしてこの桜の木、吾々がいなくなった後もどうか大きく育ち毎春桜花を咲き誇ってくれることを祈って、和倉へ向うべくバスに乗車出発する。途中押水町の喜多家、羽咋市の妙成寺を見学して定刻の五時半に和倉の加賀屋に到着。八階フロアを貸切った各室に分散くつろぎ、六時半から広間に



て総会、懇親会と夜のふけゆくまで飲み、かつ語り合つて、九時過ぎ桜誓会々員の健康を祈つて万才を三唱して閉会となる。散会後も各室を訪ね歩き歓談は深更まで続いた。

翌十五日(土)は奥能登観光希望者(二十五名)八時半宿を出発、内浦

海岸、恋路海岸を見て下時国家見学、曾々木海岸で休憩昼食をとり、午後は輪島のキリコ会館、門前の総持寺を拝観して帰路につく。金沢へは午後五時半到着、再会を約して解散した。

出席者

浅井治雄、荒川宏、飯田秀雄、五十嵐晃、石崎皓三、上田栄一、岡島弘、金藤雄三、金原経、楠隆雄夫妻、斉田元広、清水重男、新沢義男、隅谷与一郎、高木兼二、高倉健次、高島三郎、多川直次、谷内正二、永井崇顕、中島榮義、鳴瀬茂男、中村八郎夫妻、中村忠重、西村寛猛、古川博、堀口渉、松本武雄、三田幸一郎、三宅誠、松井輝雄、村木文男、山口九郎、山崎昌、八木田喜良、安田道夫、横越英一 (堀口記)

一中四十六期生

在京の集い

十一月下旬、東京在住の村井又兵衛君から案内の書状が届きました。かねてから気にしていた故中島丈治君(小学校からの同期)宅への弔問もこの際に果たしたく思い上京することになりました。来信のすぐ後に新整町小学校同窓会の幹事会があり、そ

の席で一中の同期の仲間と話したところ、松本洋三君から自分は上京出来ないけれど東京の連中に「かぶら寿し」でも持って行ってほしいとの申出があり、こりゃいいことだと私も佃煮をみつろろって準備して出席いたしました。

十二月二日(金)夜六時から銀座六丁目の「交詢社」の三階食堂でスキヤキパーティを開きました。

交詢社は明治十三年(一八八〇)福沢諭吉先生によって創設された我が国最古の文化的社交団体であり(村井君はそのメンバー)その建物は昭和四年に建てられた銀座で最も古いものである由、全く古い建物の石段は一中旧校舎の石段を想い出させ、相集う仲間達の白髪禿頭もふさわしい感!(中にはまだまだ若々しい感じの人達も居たけれど……)

吉田喜市君の乾杯で開宴、スキヤキの煮えるまでには金沢から持参のふるさとの味を賞味し(納賀君が森八の四谷店から最中を求めて来て供出)それに交歓談がスキヤキと共に煮えたがり、宴は九時すぎまで続きました。

食堂の閉じる時間となり引続きロビーに移り懇談、記念写真を撮り、互に別れを惜しみ乍ら来年の卒業五十周年記念のクラス会に再会を約し散会しました。

出席者

磯部明(静岡より) 大西正治、菅野孝夫、坂木敏雄(長野より) 下村吉郎、菅田清兼、杉田賢四郎、得田孝男、長沢剛正、中村敏、成瀬亘、西田勝次、西田敏男、納賀節二、畑中吉正、藤井政美、細川照(大阪より) 細田行知、巻山裕夫(福島より) 村井又兵衛、村上淳男、森忠吉、山田国雄、山本周三、吉田喜市、寺内良雄(金沢より) 以上二十六名。

尚このクラス会を開くに当って、村井君が幾度となく電話して出席をすすめたがどうにも都合がつかぬ人十一名とのこと。彼の熱意と努力には地元幹事としても深く感謝すると共に大いに反省(形式的連絡を)すべきと思う次第です。(寺内記)



一中四十七期同窓会開催

残暑きびしい九月二十八日、熱海において金沢一中第四十七期同窓会を開催しました。

JR東日本の熱海保養所「いでゆ荘」に集まる者二十四名、同伴夫人二名を加えて大変愉快な一夕を持ちました。再来年は卒業以来五十年を迎えます。同窓各位の益々のご健勝を祈ります。
(世話人中野)



出席者

池保、岡本欣三、大蔵吉夫、大谷渉、金崎肇、木村和義、小鍛治敏雄、杉田賢四郎、辻沢士郎、中川智雄、中川政義夫妻、中島章、中村達、西島誠一、新田正之、浜屋芳次夫妻、半田博、深見信一、福岡二郎、本田尹夫、宮保彦継、山口尚三、若松英吉、中野喜代二

◇一中五十回生(昭十八卒)

全国同窓会

金沢一中五十回生の全国同窓会は、母校創立記念日の十月十五日、片山津・柴山潟湖畔の「白山荘」で開かれた。今年が入学五十周年に当たり、その記念の集いとあって、全国から馳せ参じた同窓は五十一名。互いに頭の毛は薄くなったものの、どことなく少年時代の面影をとどめている顔、顔。

開会に先立って物故者追悼法要が行われ、旧友の松任・極楽寺住職音覚樹君読経の裡に一同焼香、さらに校歌を合唱して亡き友三十六名の冥福を祈った。

卒業以来はじめて会った顔ぶれも多く、胸の名札でやっと名前を思い出す人達もいた。お招きした桑原定平、吉崎正松の両先生は共に八十一歳。桑原先生いわく「僕はこれから



あと二十年は生きる。君達も徒らに明日を思い煩うことなく、今日只今の事に全力を尽せ」と。また、吉崎先生は桜章健児を讃える漢詩を朗々と吟じられた。そして、やんちゃ坊主だったころの懐旧談に花が咲き、懐しい応援歌、山本ボンブ先生から習った歌などの合唱が続いた。

枯野犬

小林 たけし
(通信六回卒)

テレビの間すこし片づけ雛飾る
梅かたし鎮守の森を出でぬ鳩
花吹雪浴び車座のみな笑ふ
パン屋よりパン焼く匂ひ聖五月
見残せしものあるこころ滝を去る
まっすぐに登りし蟻を吹き落す
緑陰へすこし頭をさげて入る
揚花火待つ間をすこし身構えて
郵便車とまり親子の鹿通す
湖明りして客のなき秋座敷
水上をことさら飛んで秋の蝶
萩枯れてぼつねんと空残る寺
覚むるたび羽ばたきをして浮寝鳥
鳩のつもりで鳩といる寒雀
行くあてのさもありそうに枯野犬

翌日も秋晴れのよい天気、白山が雄姿を浮び上がらせていた。大半の友は再会を約して別れたが、有志十四名は泉野出町の母校を訪ねた。かつてこのあたりは一面の野菜畑で、牧歌的なたずまいだった。が、いまは住宅や商店がぎっしり建ち並び、昔を偲ぶすまでもない。校舎は四年前に改築され、堂々たるキャンパス、厳霜碑だけが元の場所に再建されており、感慨無量だった。宮崎光二・泉丘高校長のご案内で、前日の創立九十五周年式典で新たに命名された「啓泉講堂」をはじめ、校内をいろいろ見学した。

われわれの入学前年、昭和十二年に出来た旧校舎は、鉄筋コンクリート三階建て、当時としてはすばらしいものだった。だが、現校舎はエレベーター付きの五階建て、建物といふ設備といふ、とても比較にならぬ偉容を誇っている。日曜日なのに何人かの生徒が登校していて、「共通一」次まであと99日」と書かれた教室で、黙々と自習している姿が印象的だった。

なお、金沢一中五十回生同窓会では、平成元年一月下旬に入学五十年記念文集「時はゆくよ」を刊行する。(北村尚善記)

◇一中五十五回(昭和二十三年卒)

卒業四十周年記念同窓会

金沢一中五十五回生(会長 松本進)は、去る十月八日、金沢市内の東急ホテルにおいて、卒業四十周年記念同窓会を開催しました。関東、関西、東海からも十二名がかけつけ、

総勢六十余名で懐古談に花を咲かせ、懇親会が盛大に行われました。

当日は五時半、懇親会に先立ち、恩師三十三名、級友二十二名の物故者慰霊の黙禱を捧げ、厳かに冥福を祈りました。

次は還暦祝賀の同窓会開催を、と約束し、再会までの互いの健康を誓いながら散会しました。

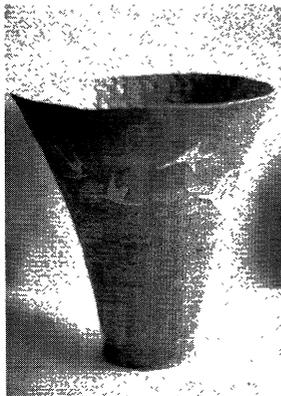
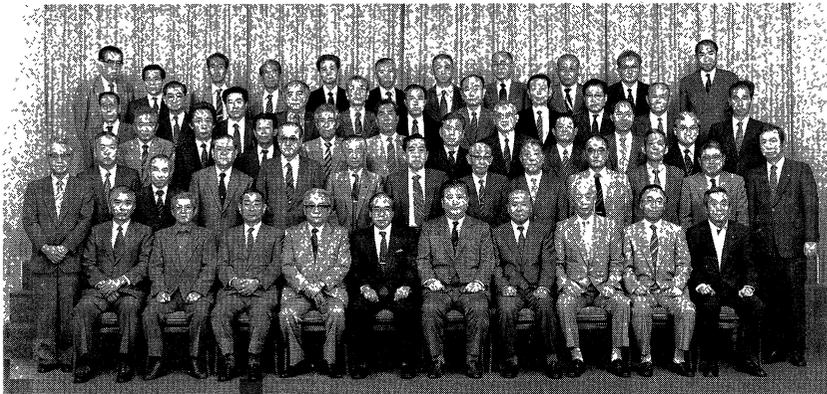
翌十月九日には有志二十名によって、千里浜カントリークラブで親睦ゴルフコンペを行い、互いに腕を競ったが、山田浩君が45・45グロス90で優勝を獲得しました。二位乙村董君、三位植田忠和君、又、ベスグロ賞は、遠来の片瀬貴文君が43・45・88で当日の栄誉に輝きました。

(金井一郎記)

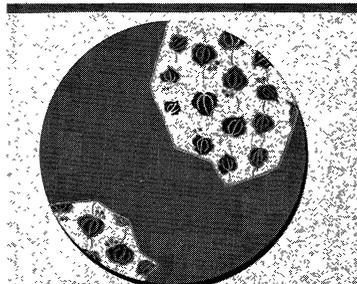
独楽窯

北村英昭
(通信二十回卒)

自分との出会い
友との出会い
自然との出会い
そして九谷との出会い
人生とは不思議な出会い
五彩の綾なす九谷に魅せられ
古きを伝え新しきを求めつつ



叩き花器



紬赤色絵鉢



色絵花鳥文鉢

「啓泉講堂」と命名

教頭 高川 義一

昭和五十九年五月、講堂棟の完工をもって、昭和五十五年が始まる全面改築工事が終り、以来、新講堂にふさわしい名称をつけてはどうかという声があったが、創立九十五周年の節目を契機にその気運が盛り上がり、職員・生徒から案を募ったところ、二十数点の応募があった。その中から四点を選び、評議委員会で選考。泉丘生の心を啓発する場という意味の『啓泉講堂』(高川教頭案)と決まり、九月十日創立記念式典に学校長より式辞の中で発表された。



更に、自然石(角閃安山岩)白山をつくっている岩石)に宮崎光二校長揮ごうの名を刻み、講堂玄関前に建立。十月十五日、厳霜碑前の慰霊祭にひきつづき、藤田同窓会副会長はじめ同窓生多数の参列を得て除幕式を行った。参列者一同は、百周年へむけて新たな一歩を踏み出そうとする母校に対し、大きな期待をこめて拍手を送った。

なお、石はPTA理事山崎正夫氏(泉丘十三回卒)よりの寄贈である。

創立百周年記念

一 泉同窓会名簿の

編集について

来る平成五年には母校が創立百周年の記念すべき年を迎えます。

明治二十六年七月に石川県尋常中学校として発足してからの歴史の中で、多くの恩師と三万名を超える同窓生が現在までの長い道を創りあげて参りました。

過去何回となく編集されました名簿を見ますと、その時々の母校の歴史と変遷の重味、素晴らしい先生、俊秀な同窓生の貌が浮かんで参りまして、名簿の持つ大きな価値を轟々と感じます。

母校が百周年を迎えるに当り、色々のプランが計画されておりますが、その中の最も重要な行事の一つとし

て、創立百周年記念一泉同窓会名簿の編集をすることになり、その委員会が昭和六十三年の秋に発足しました。

委員長として一中四十一期南秀男、副委員長として一中五十四期の吉竹毎謳、外に一中期から二名、泉丘期から数名の委員が委嘱を受けて編集に着手しました。

元より之だけのスタッフのみでは到底充分な資料の成果をあげる事は難事で、一中、泉丘の各期を通じて四年後の完本迄の論らないお力添え各期にお願いしたいと思っております。

それ等の結果の上に次の百年にも充分資料として耐え得る名簿を作りあげたいものであります。同窓諸賢の美わしいご協力を切にお願い申し上げます。

(名簿委員会)

事務局だより

◎一泉同窓会役員の不辛

一泉同窓会各期委員の次の方々がお亡くなりになりました。色々のご協力を頂きました。心からお悔み申し上げます。

一中三十四回栖原直久氏(63・3)同三十五回杉野啓氏(63・10)同三十八回新保由雄氏(63・9)同加藤俊男氏(63・11)

又元金沢一中教諭(S8・3)S13・4在職)竹内直良氏が昭和六十四年一月七日東京都の自宅で死去された。

◎同窓生よりの図書の寄贈

◇登谷栄作氏(一中四十六回)

反骨の半生

◇池田星一氏(泉丘六回)

人間メディアとエントロピー

右の図書のご寄贈戴き有難うございました。

◎名簿委員会発足

学校創立百周年記念の一環として新同窓会名簿発刊を決定、昨年九月名簿委員会が発足。委員長に一中四十一回の南秀男氏、同副委員長に一中五十四回の吉竹毎謳氏、委員に一中四十一回平石英雄、一中五十五回中橋寿雄、泉丘八回福田太睦、泉丘十八回中川恒雄の各氏をそれぞれ委嘱した。

